

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02327

研究課題名（和文）アンリ・ルフェーヴルとシチュアシオニストを軸とした建築の無名性に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Anonymity of Architecture Centered on Henri Lefebvre and Situationist

研究代表者

南後 由和（NANGO, Yoshiakzu）

明治大学・情報コミュニケーション学部・専任准教授

研究者番号：10529712

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：遊び、ノマド、迷宮、オートメーション、集団的創造などの特徴を有する「もうひとつの都市」を構想した、オランダの芸術家コンスタント・ニューウェンハイスによるプロジェクト「ニューバビロン」（1956-74）について、主に絵画のディシプリンが基盤をなし、彫刻、模型、地図などのメディア間の「翻訳」がなされる過程を明らかにする研究を進めた。さらに芸術家と鑑賞者、建築家とユーザー、作り手と使い手などの関係性を変容させるニューバビロンの射程を領域横断的に浮かび上がらせた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、絵画を中心とする美術史、模型を中心とする建築史の文脈に分断されてきたニューバビロンに関する先行研究に対して、本研究では、両者の文脈を架橋しながらニューバビロンの多面性を考察した。ニューバビロンの個々の作品について、美術史や建築史の観点にとどまらず、社会学や地理学などの観点からも、通史的かつ多角的に明らかにすることで、都市や建築の経験をめぐる学際的な研究の枠組みを構築することができた。

研究成果の概要（英文）：The project "New Babylon" (1956-74) by the Dutch artist Constant Nieuwenhuys, who conceived of "another city" characterized by play, nomadism, labyrinth, ephemeral, automation, and collective creativity, was mainly based on the discipline of painting. In addition, we have conducted research to clarify the process of "translation" between media such as sculptures, models, maps, etc., based mainly on the discipline of painting. Furthermore, we have made a trans-disciplinary study of the scope of New Babylon, which transforms the relationship between artist and viewer, architect and user, maker and user, and so on.

研究分野：都市・建築論

キーワード：建築 都市 絵画 模型 地図 ルフェーヴル シチュアシオニスト

1. 研究開始当初の背景

フランスの思想家アンリ・ルフェーヴルの都市・空間論は、空間を物理的形態と社会的形態の二重性から批判的に捉え返す「空間論的転回」の嚆矢として、社会学、地理学などの領域において再評価されてきた。しかしながら、ルフェーヴルが都市・空間論を執筆した1950-60年代当時の建築界において、それらがどのように受容されたかについての研究は十分になされてこなかった。

また、シチュアシオニストに関しても、主宰者であるギー・ドゥボールの『スペクタクルの社会』や『映画に反対して』など、消費社会論や映画論の文脈に偏った受容がなされ、シチュアシオニストの建築論についての研究は蓄積されていない。

そこで本研究では、ルフェーヴルの都市・空間論の思想を具現化したプロジェクトという性格を有し、シチュアシオニストのメンバーのなかで建築の分野を牽引した、オランダのコンスタント・ニューウェンホイスによる「ニューバビロン」(1956-74)を主たる研究対象に据えて、ルフェーヴルの都市・空間論とシチュアシオニストの建築論を架橋し、1950-60年代の建築をめぐる無名性の思想史の研究に従事する必要性を認識するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、第一に、1950-60年代のルフェーヴルの都市・空間論が同時代の建築界にどのように受容されたのかを明らかにすること、第二に、シチュアシオニストのメンバーであるコンスタントの「ニューバビロン」の全貌を、絵画を制作していたオランダ実験グループや CoBrA の時期、彫刻/コンストラクションを制作していた時期、シチュアシオニストとして活動し、建築模型やドローイングを量産した前期ニューバビロン、絵画の制作に回帰した後期ニューバビロンという4つの時期に区分し、オランダの美術館・建築博物館のアーカイブや収蔵庫の一次資料の分析によって、通史的に研究すること、第三に、第一と第二の研究内容を通じて、ルフェーヴルとシチュアシオニストの建築論を架橋し、1950-60年代の建築をめぐる無名性の思想史に、ルフェーヴルおよびコンスタントを位置づけ、それらの現代的意義を詳察することを目的とした。

3. 研究の方法

- (1) オランダやフランスを中心とするヨーロッパ、アメリカやイギリスなどの英語圏それぞれの国において、コンスタントに関する先行研究が展開されてきた文脈は異なる。そのため、コンスタントに関する先行研究を、第一に、ジャン・クラランス・ランベールらによる概説史、第二に、ウィレマイン・ストクヴィスやマルセル・ヒュームリンクによるオランダ実験グループや CoBrA を対象としたオランダの戦後美術史、第三に、シチュアシオニスト研究、第四に、英語圏におけるマーク・ウィグリーらによる建築史・建築論、第五に、展覧会図録という5つの文脈に分類して整理した。
- (2) 2017年9月から2018年8月までデルフト工科大学客員研究員として、オランダに滞在し、オランダ国立美術史研究所 (RKD)、アムステルダム市立美術館、CoBrA 美術館、コンスタント財団などにおいて、オランダ実験グループ・CoBrA 時代からニューバビロン後期に至るまでの一次資料の収集と分析を集中的に行ない、画家としてキャリアを出発したコンスタントが、絵画から彫刻/コンストラクション、建築へと関心の矛先を移行させていった経緯を整理した。またニューバビロンの着想源となったジプシーのキャンプがあるイタリアのアルバ、シチュアシオニスト結成の場となったコージオ・ディ・アッローシャなどで聞き取り調査を実施した。

4. 研究成果

- (1) 絵画のディシプリナリティが、どのようにニューバビロンの制作に発展、継承されていたのかを明らかにするため、ニューバビロン前史に関する研究として、オランダ実験グループや CoBrA 時代の絵画の特徴について、子どもや動物の本能・自発性、ロートレアモン伯爵の詩学やガストン・バシュラールの物質的想像力などとの結びつきを踏まえながらまとめた。CoBrA 時代に関しては、動物、子ども、擬人化した動物などを描いた CoBrA 前期と、戦争をめぐる恐怖や不安、空襲や火災による惨状、都市に暮らす人間の不自由さを描いた CoBrA 後期に区分したうえで、絵画の技法、線、色彩、構図などの形式レベル、モチーフなどの内容レベルから分析をした。

- (2) CoBrA の運動を、シュルレアリスムやプリミティヴ・アート、ジョアン・ミロ、パウル・クレーなどと関係づけながら、戦後ヨーロッパの美術史的文脈に位置づけるとともに、デンマークやベルギーとは異なるオランダ固有の文脈を浮かび上がらせた。
- CoBrA 解散後のコンスタントの絵画が幾何学的性格を帯びはじめ、色彩の造形的・空間的使用を探究するようになる「抽象への過渡期」について、CoBrA のメンバーでもあったイギリスの芸術家スティーヴン・ギールバート、オランダの建築家アルド・ファン・アイク、ヘリット・リートフェルトらとの交流が与えた影響について、往復書簡などの一次資料をもとに明らかにした。
- CoBrA 時代の絵画から、Neovision 時代の彫刻／コンストラクションへの移行に関して、デ・ステイル、ロシア構成主義、ニコラ・シェフェール、ルチオ・フォンタナなど、先行・関連する美術史的な文脈を踏まえながら、建築を軸とした「芸術の総合」および空間の観点から考察を進めた。
- (3) CoBrA 時代の絵画における蛇・車輪・螺旋のモチーフ、Neovision 時代のコンストラクション、ニューバビロンの最初期の作品である「アルバのジプシー・キャンプのためのデザイン」の螺旋とのつながりを見出した。
- ギー・ドゥボールとコンスタントの往復書簡などの分析を通じて、両者の技術および建築観の違いや、シチュアシオニストのなかにおけるコンスタントの立ち位置を明らかにした。また、ルフェーヴルの日常生活批判、契機、社会-空間などの概念が、ニューバビロンの理論と実践において、どのように具体的に受容され、展開していったのかを明らかにした。
- (4) 前期ニューバビロンの模型が持つメディアとしての固有性や展示方法の特徴に関して、デン・ハーグ市立美術館所蔵のコレクションや図録に当たりながら分析した。これまで先行研究では見過ごされてきた中期ニューバビロンの地図制作に関しては、未刊行のコンスタントの文書を紐解き、地図制作の狙いと内容について考察した。
- コンスタントが地図制作に着手するようになった理由を含め、さまざまなディシプリンおよびメディアを横断するニューバビロンのプロジェクトにおける地図制作の位置づけはこれまで十分になされてこなかった。そこで前期ニューバビロンにおける模型の制作を中止し、後期ニューバビロンにおける絵画の制作に回帰する過渡期にあたる中期ニューバビロンの地図制作に着目し、建築のスケール（尺度）をめぐる建築的思考と、地図のスケール（縮尺）をめぐる地理学的想像力との関係性を明らかにした。
- (5) これまでニューバビロンに関する先行研究は、絵画論と建築論のどちらかに偏ったかたちでなされる傾向にあった。それに対し、本研究では、ニューバビロンを絵画、ドローイング、彫刻／コンストラクション、模型、地図、テキスト、映像などの諸メディアの「翻訳」過程に存在するものとして捉え返した。そのことにより、これまで絵画を中心とする美術史、模型を中心とする建築史の文脈に分断されてきたニューバビロンに関する先行研究に対して、両者を架橋しながら、ニューバビロンをめぐる諸メディアの固有性と領域横断的な性格を明らかにすることができた。
- (6) ニューバビロンには、第一に、人びとの「遊び」によって形づくられるボトムアップ型の集団制作である点に、たとえばタクティカル・アパニズム、プレイス・メイキング、社会実験などへと連なる源流を見出すことができる。第二に、労働の概念が消滅し、オートメーション化した都市の構想であったという点は、AI と人間との共生をめぐる問題へと接続して議論しうる射程を持っている。第三に、芸術家と鑑賞者、建築家とユーザー、作り手と使い手などの関係性を書き替えるプロジェクトであったという点からは、建築・建築家の社会学に関する理論的枠組みを抽出することができる。今後の展望としては、ニューバビロンが有するこれら現代的意義についての研究に取り組みたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 南後由和	4. 巻 1768
2. 論文標題 CONSTANTのニューバビロンと“遊び”-ホイジンガの批判的継承	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 建築雑誌	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 -
2. 論文標題 バーチャル素材化する渋谷	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 雨のみちデザイン（ http://amenomichi.com/shuuiron/nango2.html ）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 8月2日
2. 論文標題 渋谷再開発 失われた寛容さ 高まった同質性 人を「選別」する街に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 朝日新聞デジタル	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和、聞き手 長澤夏子・宮原真美子・難波和彦	4. 巻 5月号
2. 論文標題 社会学の空間論的転回とマテリアリティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築雑誌	6. 最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永山祐子・門脇耕三・南後由和	4. 巻 3月号
2. 論文標題 オルタナティブ・トイレが可能にする豊かさ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新建築	6. 最初と最後の頁 18-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 395
2. 論文標題 都市の「仕切り」考。	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京人	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 407
2. 論文標題 モバイル・メディアと都市	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京人	6. 最初と最後の頁 30-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 147
2. 論文標題 今、建築家と商業の関係とは？	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 GA JAPAN	6. 最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠原修・南後由和・川添善行, 聞き手 小泉秀樹・羽鳥達也	4. 巻 1704
2. 論文標題 情報と都市の未来	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 建築雑誌	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 33
2. 論文標題 情報メディアの変化に対応した「新しい広場」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 EKISUMER	6. 最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 加治屋健司・清水知子・鴻野わか菜・南後由和, 司会 毛利嘉孝
2. 発表標題 都市と芸術: 東京ビエンナーレを考える1970-2020/21
3. 学会等名 LIVE RELATIONS! vol.01 DAY2, 東京ビエンナーレ2020/2021 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南後由和
2. 発表標題 トランス・メディアとしてのニューバビロン シチュアシオニスト経由の都市・建築
3. 学会等名 gallery IHA online lecture 01「ことばと建築」第3回 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 南後由和・西田編集長、聞き手 中島りか・ミズタニタマミ
2. 発表標題 ひとり空間 の時代に 今日の都市における実践の可能性
3. 学会等名 都市のみる夢展 オンライントークイベント、東京藝術大学（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 南後由和
2. 発表標題 トランス・メディアとは何か コンスタントのニューバビロン
3. 学会等名 東京大学・情報学環ホームカミングデイ 特別講演会「情報と空間」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshikazu Nango
2. 発表標題 Constant ' s New Babylon as the Transmedia
3. 学会等名 Department of Architecture, Faculty of Architecture and the Built Environment, Delft University of Technology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 南後由和
2. 発表標題 拡張する平面性・トランスメディア コンスタントのニューバビロン
3. 学会等名 表象文化論学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北山恒・高橋一平・南後由和
2. 発表標題 そして家族になる 都市はやわらかい共同体をつくれるか
3. 学会等名 ミサワホーム株式会社Aプロジェクト室・トヨタホーム東京株式会社主催シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 南後由和
2. 発表標題 コンスタントのニューバビロン論 シチュアシオニストの都市・建築
3. 学会等名 建築評論の現在 建築と言葉の応答, gallery IHA（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 南後由和・倉方俊輔
2. 発表標題 ひとり空間の社会学 都市とメディアの交わり
3. 学会等名 MEDIA SHOP（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 南後由和・西田編集長・中島りか・ミズタニタマミ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 tmyc	5. 総ページ数 10
3. 書名 「ひとり空間」の時代に 今日の都市における実践の可能性 『都市のみる夢』	

1. 著者名 南後由和・山崎泰寛編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 彰国社	5. 総ページ数 34
3. 書名 「5章 情報と住む」篠原聡子・黒石いずみ・大月敏雄・槻橋修編 『「住む」ための事典』	

1. 著者名 南後由和	4. 発行年 2018年
2. 出版社 滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科DANWASHITSU	5. 総ページ数 34
3. 書名 「建築・建築家の社会学に向けて」 『雑口罵乱9』	

1. 著者名 南後由和	4. 発行年 2018年
2. 出版社 TOTO出版	5. 総ページ数 9
3. 書名 「線を引くこと 藤村龍至の建築的思考」藤村龍至 『ちのかたち 建築的思考とその応用』	

1. 著者名 南後由和	4. 発行年 2018年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 ひとり空間の都市論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「いまこそ「トランスディシプリナリティ」の実践としてのメディアを：経験知、生活知の統合をめざして」
<http://10plus1.jp/monthly/2020/03/issue-02.php>
「東京に「ひとり空間」が多い理由」、WEDGE Infinity、2018年4月26日
<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/12620>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------